



四旬節第 5 主日 (ヨハネ 8:1-11)

イエスによってしか命は守られなかった

今週四旬節第 5 主日の福音朗読として、姦通の現場で捕らえられた女性をイエスが救ってくださる場面が選ばれました。律法の見れば、もはや逃れようのない罪ある女性でしたが、イエスは思いがけない方法で彼女を救います。わたしたちも神から思いもかけない方法で救われています。イエスの声に耳を傾け、今週の学びを得ることにしましょう。

個人的なお知らせですが、わたしは大司教様から異動の辞令をいただきまして、ここ浜串小教区から県北の田平小教区に赴任することとなりました。平戸地区には今まで一度も赴任したことがありませんので全くの素人ですが、大司教様の意向に沿えるように、新しい場所でも力を尽くしたいと思います。

なお後任の浜串小教区の主任神父様は現在太田尾小教区を司牧しておられる汐留神父様です。わたし同様に変わらぬ暖かさで接してほしいと思います。そのほかのことは、ミサの終わりにお知らせしたいと思います。

律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女性をイエスのもとに連れてきました。モーセの律法によれば、共同体を汚す罪を犯す者は、取り除かなければなりませんでした。律法学者たちの言う通り、姦通の罪を犯した女性は、石打の刑に処せられるのでした。なんとも残酷な刑ですが、手を汚さずにとというのが、さらに冷酷さを印象付けます。

ただこの場面には畏がかけられていました。ユダヤの国はすでにローマ帝国に支配され、さまざまな権限もはく奪されていたはずでした。たとえば人を死刑にする権限も、ローマ側にあったでしょう。すると、権限のないまま死刑を黙認すれば、ローマに訴える格好の口実になりました。

一方で、女性の罪を見逃せば、イエスは律法を無視していると騒ぎ立てたでしょう。律法学者とファリサイ派の人々は、どちらに転んでもよいようにして、手ぐすね引いて待っていたのです。宗教指導者たちの畏は、悪意がどこまで人間をおとしめるかを示しているようにも見えます。

イエスは思いもかけない方法で、死ぬしか道の残されていない女性に近づいていきます。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」(8・7) 共同体から罪を取り除かなければならないのは確かだが、あなたたちの中ではどうなのか。罪を取り除く努力を怠っていないか。自分のことを棚に上げて、この女性を罪ある女として共同体から排除できようか。そのように考えさせたのです。

唯一、この女性に石を投げることのできる方がいました。イエス・キリストです。罪に定めることのできるお方が、彼女を罪に定めませんでした。ここに、わたしたちが耳を傾ける必要があります。

わたしたちはついこの前黙想会を終わったばかりです。黙想会は再出発のきっかけでした。「イエスから始めてみる」その取り組みの再出発となるものでした。

今週の福音朗読も、わたしたちにイエスから始める再出発を促していると思います。すなわち、罪に定めることのできるお方が、人を罪に定めなかった。わたしたちはこのイエスの姿勢から学び、人に接するべきだということです。

イエスが「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」こう問い直した時、「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った」(8・9)のでした。わたしたちは自分の罪すら取り除けない。そのことを年長者は誰よりよく知っていたはずですが。このあとイエスの取られた態度を最後まで見届けることもせず、一人残らず立ち去ったのです。その場にいた誰一人、イエスから再出発する道を選ばず、去っていきました。

わたしたちは、イエスから再出発する道を探す必要があります。今週与えられた福音朗読で、イエスによってしか命は守られなかったことを確かめました。物語の女性はどこにも逃れようのない立場に立たされていましたが、イエスが思いもかけない方法で救ってくださいました。

わたしたちは誰に対しても、命を取り上げることは許されていません。命を守るだけでなく、わたしたちに許されている態度です。それなのにわたしたちの力不足で命を守れない時があります。わたしたちはそんな場面で、どうかこの人の命を守ってくださいと、イエスに委ねるのです。

よくよく考えると、わたしたちも罪ある生活から逃れることができなかったのを、イエスの十字架という思いがけない方法で救われた者のはずです。ですから、「わたしたちはイエスによって再出発します。どうかこの人にもあなたによって再出発する道を与えてください。」誰に対してもそういう接し方をしたいと思います。